

資 料 編

本報告書には、3編の記事を資料編として掲載している。簡潔に内容を紹介すれば、下記の通りである。

「鳴門海峡の渦潮」を挟んで阿波徳島と向き合う淡路は、『古事記』の「国生みの島」として広く知られている。その「国生み神話」には特別な力があり、21世紀には文化庁が進める日本遺産「国生みの島・淡路」認定を生み出しているが、江戸時代には、島民を中心に、数次にわたる地誌の編纂という果実をもたらしている。「淡路四草」と総称されるもので、『淡路草』・『淡路堅草』・『味地草』に『淡路国名所図絵』を指すが、未刊の兵庫県立歴史博物館蔵『淡路名所図会』を加えると5作品となる。

それらの地誌に共通する事象として注目したのが、えびす信仰に関連する記述である。島の周囲を海に囲まれている地政学的条件は、漂流物の到着をもたらしたが、その代表がえびす（戎・蛭子・恵比寿などと表記）である。そうした観点から、おもに『味地草』を通覧して作成したのがえびす関連記述一覧である。

「淡路国分間絵図」一覧は、令和3年（2021）12月に刊行した『淡路島文化財総合調査報告書 1988-2000』が発端となっている。島内に多数の「分間絵図」が残っているという情報が得られたことから着目され、江戸時代の淡路島の歴史地理ないし古環境を復元する可能性をもつ資料として再発見されたものである。

鳴門海峡周辺関連年表は、『「鳴門の渦潮」世界遺産登録学術調査報告書～文化編～』に倣って付けた。ただし渦潮の関係で項目を選ぶことはたいへん難しく、ボリュームが多く、玉石混交である印象は否めない。今後、さらに精査することを前提に掲載することとする。

なおそれぞれマップが添えられており、視角的な理解を促す。えびすマップでは、島の全周囲に漏れなくえびす信仰の痕跡を見ることができ、えびすが淡路島を解くキーワードであることを教える。また分間絵図所在マップからは、その偏在振りと同時に、集中する地区での解読の可能性が窺える。

それぞれについては解題を参照されたい。